



joh's short short story

作者：johu

概要：その昔、パソコン通信「日経MIX」の「sf/writing」分科会に投稿した作品と、blog「short short story または 晴耕雨読な日々」に投稿している作品のまとめです。

全体目次

宇宙（そら）から
博士の日常
とある会話
！
？
ファンタジー

目次：宇宙（そら）から

宇宙（そら）。全ては、ここから、

「暗号」

「進化する．．．」

「君持つ花は。．．。」

「証拠隠滅」

「魅せられて」

「時報」

「携帯がない」

「秒読み」

「秒読み．．．その後」

「定時アクセス」

「和声（ハーモニー）」

「過ぎたるは、」

「メッセージ」

「暗号」

どうやら、やつらを振り切ったようだ。しかし、油断は出来ない。そうだ、この間に、手に入れたデータをここに隠しておこう。暗号化するとしてベースを何にするか。この惑星の酸化水素の集合体の中に、奇妙な炭化水素型の生命体がいる。増殖する過程で螺旋状の分子結合体が設計図になっている。これは使えそうだ。データを4値レベルに変換して、この分子結合体の複製コードを付加して出来上がりだ。固い保護膜をつけてあるから、たやすくこの生命体に入り込める。入り込めば、その中でデータの複製を作り続けるはずだ。複製率を抑えておいたから、この生命体を絶滅させることはない。後で戻ってきてデータを回収するのも簡単だ。酸化水素ごとひとすくいだ。さて、移動するとするか。．．宇宙船が、ここの惑星の大きさには不相应に大きい衛星の脇をかすめ飛び去った。．．第五惑星付近で大きな爆発が生じ、第五惑星は、無数の小惑星となった。．．彼は二度とこの第三惑星に戻れなかった。しかし、データはデータ化けを起こしながらも自己複製し続けた。

「進化する．．．」

一隻の宇宙船が原始惑星から飛び出した。

「そこで何をしておる。」

「せんちょう～」

「何だ。情けない声を出して、どうしたのじゃ。」

「実は、．．．」

「どうした、×××や△△△の本がなくなるとも言うのか。」

「え。どうしてそれを。」

「フオ、フオ、フオ、わしが気付かぬとでも思ったか。

出発の際、あの惑星に捨てておいたわ。

ま、あきらめて仕事に戻るんじゃな。」

「船長は気付いていたかな。本に自己修復機構を組み込んでいたのを。」

「さあ、どうかな。どっちにしろ、あの惑星には戻らないんだし、

関係ないだろう。」

「ん。まあそうだけど。あの自己修復機構はちょっとした自信作だったんだ。

あの惑星には、本の再生に必要な原料はたっぷりそろっていたからな。

どうなっているかなと思って。」

「忘れるよ。それより、▽▽▽はまだ残っているって知っているか。」

．．．．．

惑星では、本は自己修復し続けた。やがて、近くでうごめいているものが本を取り込んだ。自己修復機構は、それを逆に利用して本を修復し、さらにそれらとともに増殖することを覚えた。それらは、本の部分をそのまま残したまま爆発的に増殖し、進化を始めた。

「君持つ花は。。。」

彼女の名は、ノーラ。駅の花売り娘だった。

彼の名は、トーマス。まだ学生だった。

ボーイ ミーツ ガール。

トーマスは言った、「君が持つ花になりたい。」と。

やがて戦争が始まり、男達は駆り出された。

そして女達は、町を守り続けた。

やがて戦争が終り、彼女は花売り娘に戻った。

いく人もの男達は戻り、何人かは帰らなかった。

そのうちの一人がノーラに届けたものは、トーマスの遺品だった。

彼は言った、「彼はこの中に生きている。」と。

それは一粒の種だった。彼の血を吸った異星の植物の種だった。

そして。。。。

「証拠隠滅」

これは俺の船だ。惑星離着陸可能型のスペース・ヨット。
これを手に入れるためにどんなに苦労したことか。それをあいつは、いとも簡単に俺から取り上げやがった。俺は、あいつにだまされたんだ。
しかし、今度は俺がだましてやった。あいつをうまく俺の船におびき出し、地球への着陸を開始した。自由落下状態であいつが俺にかなうはずがない。俺はあいつを殴り倒し、エア・ロックから放り出してやった。
これであいつは、塵となって地球へご帰還となったわけだ。
次の日、刑事がやってきた。彼は言った。「あなたのヨットの外壁から、ラジオアイソトープが検出されてますね。ご存じように、これはある病気の治療に使われているものでして。実は、この治療を施された人物で行方不明者が一人いますね。昨日、スペース・ステーションから急に姿を消しているんですよ。もしやご存じではないかとお伺いしたいわけなんです。」

「魅せられて」

俺を呼ぶ声が聞こえた。窓の外を見た。炎の樹の火が消えようとしていた。

ここ、惑星S Bは自転周期と公転周期のわずかの違いから、200地球年の昼と200地球年の夜を持つ。この惑星の夜の側にある大陸に森があった。その森の中央付近に位置している一本の樹が赤々と燃え、森の木々を照らしていた。この炎の光が長い夜の間の森の木々の光合成を可能にさせていると考えられていた。

楽な仕事だった。この惑星で炎の樹を見てればいいのだ。多額の報酬につられ、この仕事に飛びついた。病院で検査を受けた後、俺はここ惑星S Bに到着した。

この森が発見された当初は大勢の研究者が訪れたが、やがて常駐の観測者が一人となっていった。炎の樹が燃え尽きかけた頃、近くの本の樹が受け継いだことが確認された。しかし、残念ながらその瞬間を映すはずのビデオは作動しておらず、唯一の観測者は発狂していた。そして、何度も同じような失敗が続いた。

観測所には、何でも揃っていた。映画や音楽、その他エンターテインメント設備。たっぷりの食料に酒。完璧な医療設備。何の不満も無かった。．．．しかし、いつしか俺は炎の樹に魅せられていった。炎の樹は燃え尽きようとしていた。

何回目かの失敗の後、観測者に義眼使用者が応募して来た。その応募者には内緒で義眼の中にビデオが仕込まれた。今度こそ、その瞬間が得られるはずだった。

俺を呼ぶ声が聞こえた。いつしか炎の樹の目の前にいた。俺は、まだ燃えている炎の樹の枝を手にした。肉が焼ける匂いがした。枝を折るとそれも近くの樹まで持って行き、その樹の枝に火を移した。手の中で炎の樹が燃え尽き灰となった。絶叫が聞こえた。俺の声だと気付いたのはしばらくしてからだった。俺は．．．

惑星S Bへの立ち入りは禁止された。その後も、近くを通った宇宙船からは、炎の樹の森からと思われる光は観測されたと言う。

「時報」

テレビは相変わらず、スキャンダラスなニュースを流していた。．．．俺はチャンネルを切り替えた。そこでは、時計の秒針が7時を指そうとしていた。

半年前、彼は電波望遠鏡で奇妙な電波をキャッチしたと言っていた。そして、一週間前に彼は一通のメールを俺に残し自殺した。彼がキャッチした電波は、ある惑星からのメッセージだった。そこでは最終戦争が勃発し使われた恒星破壊兵器の余波が他恒星系にも影響を及ぼすと言うのだ。メッセージはその警告と余波の詳細を伝えていたと言う。彼が解読に成功した時には、余波が太陽系に届くまであと一週間だった。彼は、絶望のあまり自殺した。

俺は、半信半疑だった。異星人が作ったデータを解読することが可能だろうか。地球人が作ったあのパイオニア10号のメッセージでさえ、解読できた地球人は、たったの一人だった。彼が間違えなかったと、どうして言えよう。雑音を意味のあるデータに見せかけることはたやすい。彼がそうしなかったと、どうして言えよう。

テレビでは、時計の秒針が7時を指して、時報が鳴った。そして．．．

「携帯がない」

「いたっ、ちょっと気をつけてよー。なによ、このプラカード。
「あ、すいません。フォーさん、いらっしゃいませんかー。」

太陽黒点が活発化し、ギガヘルツ帯に強烈な電波障害が地球を襲った。
電波障害の余波は衰えず、一ヶ月が経とうとしていた。
3Gに移行していた携帯電話は、地下鉄、地下街を除き、壊滅状態だった。

「ようやく見つけた。じゃこれ、伝言です。100円頂きます。。。まいど、どうも。」

渋谷などでは、伝言を指定した人に渡す、いわゆる『伝言屋』が台頭していた。
駅前には、すでに伝言屋のプラカードで一杯だった。

「・・・、ムラサメさん宛の伝言発見。右に15メートル、青い服。
「・・・、ラジャー、続いて、フォーさん宛ての伝言、よろしく。
「・・・、OK。」

増えすぎた伝言屋に対応して、アマチュア無線家とバードウォッチャーが手を結び、
『伝言屋検索』商売が始まろうとしていた。

「秒読み」

水星軌道付近にいる探査船に仕込んでおいた量子対のもつれが破れた。
予想が当たった。黒点観測を続けてきたのは伊達じゃない。
太陽活動による電磁波障害が起こるまで、あと5分。

俺は、地下金庫に下まで掘り進めた穴で、金庫の壁を焼き切り始めた。
10分後には、金庫内部に到達するはずだ。当然警報が鳴る。いつもなら。
しかし、その時、電磁波障害起こり、電子警報は役に立たなくなるはずだ。
俺は、時計を見ながら、面レーザー照射を調節し、カウントダウンに備えた。
じりじりと時間が過ぎていく。
あと1分。

「お客さん、どうです。全然赤信号につかまらないでしょう。
「いえね、この街の信号機のタイミングは全て頭に入っているからできあ。
「ほら、次の信号も直前で青に変わりますよ。

1秒前。ということは、金庫を焼ききるまであと10秒。

「あれ、信号が消えた、
あわててブレーキを踏んだが間に合わなかった。
交差点に入ると右から車が迫っていた。とっさに左にハンドルを切った。
目の間には、工事の車が、

その時は、来た。間違いはない。俺の読み通りだったはずだ。
しかし、レーザー照射がその瞬間止まった。電源が止まったのだ。
工事車に見せかけた電源供給車も、電磁波対策は完璧なはず。
考えられるのは、事故か？発見されたのか？
なんてこったい、ここまで来て。。。

「秒読み．．．その後」

全く、ついていなかった。俺の予想通りの展開だったのに失敗したのだ。それも、予想が当たったために。たとえ成功したとしても、何の意味を持たなかったけど。

太陽黒点の活発化で発生した電磁波障害は、途方もなかった。あらゆる電子機器がLSIレベルで破壊された。現代社会では、それは、文明の利器を一瞬にして失うことを意味した。ハザード・マップなど役に立たない。TTLレベルのラジオ等は、破壊されなかったが、放送局の自体が動かなくては、意味はない。同様に、発電所がやられてしまい、工場も動かない。動くものは、クラシック・カーくらいなものだ。つまり、電子機器を始めとする文明の利器と称するものの回復は、数十年以上に渡って、望めないだろう。情報を全てネットにおくネットワーク社会では、それすらも怪しい。

俺は、「食べられる野草」という本を片手に南に歩いていた。ことが起こってから、大抵の奴らは、スーパーへ押し入り、食料品をあさっていた。事態を把握した、俺は、すぐ本屋へ向かい、役に立ちそうな本をあさった。「食べられる野草」もその一つだ。行く先々で会った人々のやっていることは、相変わらず、スーパーの食料をあさっているか、救援を待っているかのどちらかだった。そんなことをしていても、先がないことは、少しばかり考えればわかることなのに。

俺は、冬になる前に出来るだけ温暖な土地に行こうと南へ向かった。こうなることなら、家庭菜園でもやっておくんだと後悔しつつ。

「定時アクセス」

ぬけるような青空の中を太陽が昇り始め、ビルの谷間に朝日を照らし始めた。

パソコンに自動的に電源が入り、モデムを通じネットへのアクセスを開始した。オートパイロットである。いくつかの room を巡回した後、アクセスを絶つのが日課だった。今日もメールは届いてなく、room への書き込みも無かった。突然、回線からの応答が無くなった。オートパイロットは一定時間後回線を切り、数秒後、再度ネットへのアクセスを開始した。しかし、規定回数の呼び出しになっても応答は無かった。規定回数のアクセスを試みられた後、パソコンの電源が自動時に切れた。

突然襲った、高エネルギー宇宙線照射により生命の死に絶えたこの都市で、バックアップ電源に守られ辛うじて生き残っていたネットワークがダウンした。

次の朝、パソコンに太陽電池から供給される電源が自動的に入り、もう二度と応答することのないネットへの定時アクセスが試み続けられていた。

「和声（ハーモニー）」

ラジオから流れている曲は、コード進行が終わりを告げている。
君は知っているだろうか？曲の終わりの音が、その曲の調性を決めていることを。

人類は、ついにファースト・コンタクトに遭遇した。
彼らの言語は、絶対音感によるものだった。必然的に、絶対音感を持つ音楽家が、通話役に選ばれた。

モーツァルトは、12番目のセレナードを書いたときこういった。
「急いでナハト・ミュージック（夜の音楽）を作らねばならなかったのです。
ハーモニーのためにすぎません。」
僕は、朝の音楽を書こう。君と詠唱するために。夜明けを呼ぶ歌だ。

彼らの体形は人類に似て、その話し言葉は、歌声に例えられた。そのため彼らは、セイレーンと呼ばれ、信奉者も現れた。一方で、人類に害をなすと考える人々もいた。対立が始まるのは、時間の問題だった。

コード進行は、君には言葉であり、僕には音楽だ。さあ、歌おう、夜明けの歌を。
奇跡が起きた。人とセイレーンの会話にハーモニーが生まれ、対立は回避された。
君と僕の歌を。

「過ぎたるは、」

とある惑星、場末のカウンター。異様なマスクをしたお客がパフェを食べている。その男に、隣に座っていた客が話しかける。

「失礼ですが、甘いもの好きなんですか？ いえね、ちょっと、そのマスクが気になりましたね。」

「ああ、これね。そうだよ。僕もこんなマスクをしたくはないのだけれど。これも、甘い物好きがこうじて、マスクをする羽目になったんだ。」

「へえー、そうなんですか。そりゃー、また、どういった訳なんですか？」

「えっ、聞きたい。いいよ、話してあげる。ミラクルフルーツって知ってる？」

「ええ、あの酸味を甘味に変えるってやつでしょう。」

「そう、ある惑星で、そのミラクルフルーツ以上のフルーツがあるって聞いたんだ。しかも、現地語で『頬っぺたが落ちる』って意味の名前なんだ。これは是が非でも食なくてはと思って、探していると、あちこちで、いやに厳しいことを言われるんだよね。やれ『覚悟はあるのか』とか、『酒は飲んでいないよね』とかね。これは、ひょっとするとドリアンみたいなフルーツじゃないかと期待がふくらんでいったね。ようやく、食べさせてもらえる所を見つけたんだ。」

「それで、食べることはできたのですか？」

「もちろん、できたさ。それに、噂通りおいしかった。それこそ、頬っぺたが落ちるくらいにね。」

「そりゃ、良かったじゃないですか。でも、それがマスクとどうつながるんですか？」

「そのフルーツは、ミラクルフルーツと同じで、酸味を甘味に変える酵素が入っているんだ。ミラクルフルーツと違うのは、そのフルーツ自体に強烈な酸が含まれているってこと。つまり、甘味に感じたのは、そのフルーツの強烈な酸味なんだ。」

「というと、、、」

マスクをはずしながら、男は言い始めた。

「そう、その酸味で、頬っぺたが溶けちゃったのさ。」

「メッセージ」

とある太陽系の第3惑星に一隻の宇宙船が飛来した。

「本当にこの惑星なの？」

「そうだよ。飛来した人工物と思しき物体の軌道から計算するとこの太陽系になるし、物体に刻まれたメッセージが意味するところは、第3惑星だろう。」

「そうだけどなー。今のところ、人工物らしきものと言ったら、あの四角錐だろう。近くの物体の一部が、メッセージの一部と似てたけど、あとは似てるとは言い難い。それに、大きさがまるで違う。メッセージに刻まれた物体自身の形状は、大きさの比較のためだとすると、類推できる大きさとは、桁違いだぜ。」

「あせるなって、まだ上空からのぞいているだけじゃないか。さっきの類似率の高い部分で再検索しているところさ。きっと、もっと類似率の高いものが見つかるよ。」

「ほら見つかった。。。あれ、やっぱり類似しているのは、一部だけだね。4つまとまって見えるね。大きさは、、、見つけやすく大きくしたのかも。」

「で？あとは何もないし、文明があったなんて、とても思えないよ。あったとしても、もう滅んだか、この惑星を見捨てたかだね。」

「うーん、近くにもう一個あるけど。同じく一部だけか。何の意味があるのだろう。」

「一部だけ残すことに、どんな意味があるのかなんて、理解する気にもならないよ。悪いけど、お遊びはこれまでにして、任務に戻ろうよ。」

「そうだね。せっかく、ファースト・コンタクトができると思ったのに。。。」

かつて、人類と呼ばれた種族がいなくなった地球では、建造物はほとんど朽ち果て、緑で満ち溢れていた。

目次：博士の日常

博士の考えは、どこか一味(?) 違います(笑)。

- [「虫型ソフトウェア」](#)
- [「虫型ロボット」](#)
- [「失敗作 その1」](#)
- [「失敗作 その2」](#)
- [「失敗作 その2」](#)
- [「失敗作 その3」](#)
- [「流れ星」](#)
- [「最適化ソフトウェア」](#)
- [「完成間近」](#)
- [「失敗作 その4 - 見えない壁」](#)
- [「失敗作 その5 . . . 量子コンピュータ二題」](#)
- [「失敗作 量子コンピュータ三度 \(みたび\)」](#)
- [「独白への序章」](#)
- [「バグ・バスター」](#)
- [「デジカメ時代の崩壊」](#)
- [「誤動作」](#)
- [「独白への序章 . . . その後」](#)
- [「自己主張」](#)
- [「虫型ロボット . . . 再び」](#)
- [「うるさい塵」](#)
- [「実験材料」](#)
- [「独白」](#)
- [「実証手段」](#)
- [「夢見る機械」](#)
- [「魔法の装置」](#)
- [「一寸先は、」](#)

「虫型ソフトウェア」

助手：博士。このコンピュータ、反応が早くなったような気がするんですが、チューンアップしたんですか。

博士：うむ。新開発の虫型ソフトウェアを走らせているのじゃ。

助手：虫型ソフト。それって、バグだらけのプログラム？

博士：ばかもの。ソフトウェア・エージェントの一種じゃ。このプログラムは、コンピュータの資源の小さな空きに虫のように入り込み、資源が最大限に活かされるよう、常に資源の最適化を行っているのじゃ。

助手：要するに、メモリーの再配置やハードディスクの最適化が勝手にこなわれているということですか。すごいですね。

博士：ま、それほどでもないが。

助手：あれ、博士。なんか急にコンピュータの反応が鈍くなりましたよ。

博士：うむー。今は虫のいどころが悪いのじゃな。

「虫型ロボット」

助手：博士。新しいロボット作ったと聞きましたけど。

博士：うむ。これがパラレルメカニズムを使った六本足の虫型ロボットじゃ。
これなら、どんなところでも動きまわれるのじゃ。

助手：え。どれですか。見えませんが。

博士：わしの手ひらの近くに近づいて、よく見てごらん。

助手：お、何かのってい。わーっ．．． ごくん．．．

博士、私の口の中に飛び込んで。飲み込んでいましたよ。

博士：大丈夫。心配いらん。直に気分がよくなる。

助手：えー。そんな。ロボットを飲み込んだって、気分なんか良く．．．あれ、
変だな。なんか急にいい気分になってきましたよ．．．そうだ。博士、
いい飲み屋を見つけたんですよ。今日は、私のおごりで行きましょう。

博士：うむ。虫のいどころが良いようじゃな。

「失敗作 その1」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」

「ねー、はーかーせ。なに突っ立ったまま返事もしないんですか。」
助手、博士の肩を叩く。

「わーッ。博士が固まってしまっている。押してもピクリとも動かないや。
「この装置のボタンを押した状態でとまっているんだ。何の装置だろう。
助手、しばらく考え込む。

「解った。『謎の円盤UFO』にもでていた時間を止める装置だ。
「押した瞬間に博士の周りの時間が止まってしまったんだ。
「しかし、博士自身その中に取り込まれてしまうなんて、また失敗作だな。
「でもどうしよう。このままにしておくわけには行かないし。
助手、また考え込む。

「まっいいか。そのうち装置も電池が無くなって止まるだろう。」
助手、退場する。

「失敗作 その2」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」

「うむ。これは、搬送波にタキオンを使ったモデムじゃ。

これを使えば未来と通信できるはずなのじゃが。」

「ふーん、また失敗作ですかあ。」

「そんな事はない。理論は完璧じゃ。それに、実際試して見て来年君が結婚

することさえ知ることができたのじゃ。」

「そっそれじゃあ、大成功じゃないですかあ。．．

でもうれしそうじゃないですね。どうして浮かない顔なんですか。」

「それなのじゃが。西暦2000年以降がちっともつながらんのじゃ。」

「な、何ですって．．．それってもしかして。」

「うむ．．．君もそう思うか。そこで君に相談なのじゃが。」

「はっ、はい。私に出来ることでしたら。」

「やはりファームウェアのバグに違いない。バグ退治を君に頼みたいのだが。」

「失敗作 その3」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」
「うむ、これはタイプライターじゃ。」
「えー、今どきタイプライターだなんて。どうしたんですか、博士。」
「これはただのタイプライターじゃない。」
「えー、そんなに高価なものなんですか。」
「ちがーう、ばかもめが。これは自動文章作成機能付きなのじゃ。」
「へえ～。どうやって、文章が作られるのですかー。」
「何じゃ、信じておらん。まあ、無理も無い。
これはな、無作為に抽出された言葉を繋ぎ合わせ、文章を生成し、
意味のありそうなものだけ打ち出すようにしてあるのじゃ。
ま、意味のありそうなものを見つけ出すアルゴリズムがみそじゃな。
これさえあれば、ショートショートくらい造作もなく出来るはずじゃ。」
「お、博士。何か打ち始めましたよ。」
「どれどれ。読んで見よう。」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」
「うむ、これはタイプライターじゃ。」
「えー、今どきタイプライターだなんて。どうしたんですか、博士。」
「これはただのタイプライターじゃない。」
「えー、そんなに高価なものなんですか。」

：

「しまった。無限ループに入っている。」

「流れ星」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」

「うむ。これは、タイムマシンじゃ。作動した時どこに出るかわからんからな。宇宙空間の真空状態にも、深海の高圧にも耐えられるように作ったのじゃ。」
「わー。私にも乗せて下さい。そうだ、カメラを持って来ますからちょっと待って下さい。」

「やれやれ。これから試運転だというのに。しかたないやつめ。」
「は、はかせ、たいへんです。隕石がここに向かって落ちて来ます。」
「なに～、い、いそいでタイムマシンに乗るのじゃ。」

「博士。ここはどこですか。」
「うむ。だいぶあわてたからな。時間は、適当にセットしてしまったのじゃが。ちょっと待て。．．．計器によると1時間前に飛んだらしい。」
「どう見ても地球ではなく、宇宙空間のように思えるのですけど。」
「もちろんその通りじゃ。考えてもみたまえ。地球も太陽系も猛スピードで宇宙空間を移動しておる。1時間前では宇宙空間でも、1時間後には地球上になる。現にほれ、そこに地球が見えておる。まっ、安心したまえ。外装は大気圏突入の熱にも耐えられるように作ってあるのじゃ。」
「博士。大気圏突入のようすを地球から見たら、もしかして隕石に見えませんか。」
「うむ。見えるだろうな。」

「それじゃ。タイムマシンを動かす前に見た隕石というのは．．．
マッド・サイエンティストとして名の知られた博士の研究所に隕石が落ち、大爆発が起こった。目撃者によると、それはさながら巨大な花火のようだったと言う。」

「最適化ソフトウェア」

助手：博士、新しいソフトウェアを作った聞きましたけど。

博士：うむ。今動かしているところだ。

助手：へえー、どんなソフトなんですか？

博士：この画面を見たまえ。

助手：お～、これは。。。って、何も映っていないじゃないですか？

博士：ふお、ふお、ふお。何を言っているじゃ。ちゃんと出ているじゃよ。

私に最適化されたソフトじゃからな、私以外には見えないのじゃ。

助手：えっ、それじゃ、僕以外には誰にも見られない僕専用のソフトが作れる、ということですか？

博士：そう、じゃよ。じゃが、その前に君のプロファイルを取らないとな。

助手：じゃあ、止めときます。本当は映っていないだけかもしれませんからね。

助手退場する。

博士：うむ。今回はちと、手を抜きすぎたかの一。。。。

「完成間近」

助手：博士、ついに完成しましたね。

博士：うむ。君のおかげじゃよ。

助手：そんなことはありませんよ、早速スイッチを入れましょう。

（ついにきたぞ。設計図は手に入れてある。

成功を確認したら、この研究所からおさらばだ）

博士：おー。それでは、入れるぞ。

博士スイッチを押す。何事も起こらない。両者固まる。

助手：はかせ〜。なにもおこらないですよー！

博士：うーん。だが、理論は完璧なはずじゃ。エネルギーは大丈夫か。

助手：はい、理論値通り消費されています。

博士：えーい、失敗じゃ、明日から、やり直しじゃ。

助手：わかりました。それじゃ、また明日お邪魔します。

（ちえ、また延びたよ。今度こそと思ったのに）

助手、落胆した様子で退場する。

博士もう一度スイッチを入れる。装置が動き出す。

博士：ホッホッホッ、実験は成功じゃな。

2度スイッチを入れると作動するように、改造しておいたのじゃ。助手に

気付かれなかったのは、幸いじゃ。彼はまれに見る優秀な助手じゃからな。

ここで完成させて、出て行かれては困るからの〜。

しかし、愛想をつかされて出て行かれぬよう、また新しい発明を考え出さんとな。

別室の助手

助手：なるほどね。隠しカメラをしかけて置いてよかった。

それじゃ、この発明を売りさばいて、次の発明とやらにつきやってみるか。

「失敗作 その4 - 見えない壁」

助手：は～か～せ～、イテッ！

助手、入り口のところで見えない壁にぶつかる。

助手：なんですかこれ？

助手、見えない壁を手で確かめる。

博士、入り口のほうを見て助手に気付く。何かスイッチを操作する。

助手、使い棒がとれたみたいに倒れこむ。

博士：おはよう、早かったな。

助手、今まであった見えない壁付近を探る。

助手：博士、今までここに見えない壁がありましたけど。。。

もっ、もしかしてバリアですか？

博士：ま、そんなもんじゃ。

助手：すごいじゃないですか～！昨日までありませんでしたけど、いつの間に？

博士：ま、理論は昔から判っていたからな。作るのは造作もなかったよ。

入り口に、強磁場を張り巡らしただけじゃ。

助手：それだけで、なぜ壁が？ 磁石にくっつくような物は持っていませんよ。

博士：空気中の酸素分子は、常磁性体じゃからな。張り巡らした磁場で固定化され、バリアのようになったのじゃ。

助手：えっ！それって、強磁場を使った酸素のフェイズ・シフトってやつですかー。

大発見、でもないか。。。大発明、でもないですね。。。でも、すごいですよ。

なんで、今まで作らなかったのですか？

博士：酸素がそこに集まってしまうので、窓を開けていないと窒息してしまうじゃ。

助手：。。。

確かに窓が開きっ放しじゃ、入り口だけバリアされても意味ありませんね。

「失敗作 その5 . . . 量子コンピュータ二題」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」

「うむ、量子コンピュータを使った多世界表示装置じゃ」

「え、あのエヴェレットの多世界解釈ですか？」

「僕は、コペンハーゲン解釈のほうが好きですけど。。。」

「何を言っとるじゃ。あれほど先入観で物事を見てはいけないと言っとるじゃないか。

論より証拠じゃ。ほら、これを見なさい。」

…
「博士、僕らがただ映っているだけのように見えますけど。」

「うむー。たまたまこの世界が映っているのじゃな。。。」

「は～か～せ～、こんどは、なんですか？」

「うむ、量子コンピュータにチェスプログラムを組み込んだところじゃ。」

「博士、またそんなこと言って。こないだと同じ、失敗作じゃないですか？」

「な、何を言っておるじゃ、今度こそ間違いない。ゲーム木のあらゆる状態が、量子のもつれを通して、あらゆる多世界で試され、最適の結果がここに現れるはずじゃ。」

「どれどれ、では、僕がお相手しますよ。先手でいいですか？ e 4 と」

…
「博士、何も反応がないですけど。」

「うむ、プログラムにバグは無い、つまり無誤謬なはずじゃ。。どうやらゲーデルの不完全性定理により、無出力になったようじゃな。」

「失敗作 量子コンピュータ三度（みたび）」

助手、端末の画面をなにやら見ている。

博士、部屋に入ってくる。

博士：きみ、何を見ておるんじゃないか。

助手、慌てふためき席を立つ。

助手：あ、博士。お、おはようございます。

博士、端末を覗き込む。

博士：チャットしておったのか。。。って、これは量子コンピュータの端末じゃないか？

しかも、この話し方は、エリ君そっくりじゃないか？ 君、なにをしたんじゃ。

助手：実は、試しに、elizaプログラムを組み込んでみたのです。

そしたら、こんな会話になってしまって。

博士：そうか、エリ君ときみは、

助手：博士、それは、

博士：あー、うむ、そうじゃったな。しかし、そうすると、多世界の中にエリ君が生存している世界があり、量子のもつれを通してつながったという訳か。

助手：博士、そう思われますか？ 僕には自信が持てなくて。。。。

博士：まさかな。大方、エリ君の話し方をデータに使うってプログラミングしたのじゃろ？

昔、多世界でお互いに失った恋人を見つけ別の多世界で結ばれるSFを読んだことが

あったが、そんなはずは無いな。大体、量子コンピュータが、失敗作ということは、

君も判っておるはずじゃ。

助手：。。。

博士：それより、この失敗作をどこかに片付けてくれたまえ。

助手：えっ、

博士：わたしには、そんな失敗作にかかわっている暇は無いじゃ。

助手：はい、了解しました。。。博士、ありがとうございます。

助手、端末装置を運んで部屋を出る。

博士、ほくそ笑む。

「独白への序章」

「ハ〜カ〜セ〜、ソレハナンデスカ？」

「うむ、これはな、」

「ハ〜カ〜セ〜、ソレハナンデスカ？」

「うむ、まだ早いぞ」

博士、スイッチを切り、キーボードになにやら打ち込み始める。

「さあ、これでどうじゃ」

博士、スイッチを入れる。

「は〜か〜せ〜、なんですかそれ？」

「うむ、これはな、量子コンピュータを組み込んだ、」

「はかせ、またしっばいさくですかー」

「うむ、まだじゃな」

博士、再びスイッチを切る。

「量子コンピュータは完璧なはずじゃ。やはり、ナレッジ・エンジンの問題か？」

「まったく、助手のやつめ。とっととあっちに移ってしまうとは。

「とはいえ、量子コンピュータが残ったことは幸いじゃた。動いたのは、こいつだけじゃからな。

「さてと、ナレッジ・エンジンを再設計するとするか。

「バグ・バスター」

助手：博士、お誕生日おめでとうございます。

博士：そうか、今日は。。。忘れておったわい。

助手：博士、これは、お誕生日のプレゼント、私の最新作です。

博士：ありがとう。ところで、何じゃね、これは。

助手：この前の量子コンピュータをリファインして、バグ対策プログラムを組み込みました。バグを検出して修正するバグ・バスターです。

博士：そりゃ、すごい。量子のもつれを利用してあらゆる状態でプログラムを動かし、バグを検証するわけじゃな。ところでこれは、完全かね。

助手：もちろん、「未来通信モデム」のバグも一瞬で直しました。

博士：なるほど、どれ、それでは、試してみよう。

ふむふむ、ここをこうしてと。。。これでどうじゃ。

助手：博士、何のプログラムのバグ取りを試しているんですか。

博士：なに、バグ・バスター自体をバグ・バスターにかけてみたのじゃ。。。どうやら結果が出たようじゃな。

助手：ど、どうなりました。

博士：うむ、やはりそうか。無誤謬な上に完全であるためには、自分自身を消すほかなかったようじゃな。

「デジカメ時代の崩壊」

「はい、写すよー。笑って。
最適の笑顔でシャッターが切れる。いまどきのデジカメには当たり前の機能だ。
「OK。ほらこんな感じだよ。ん。これは。
「え、どうしたの。うっそー。誰これ、
「わ、わかんないよ。なんで、
「さっさと、白状しなさい。この浮気ものー。」

最初は、ほんの気まぐれだった。
多世界を開く扉が、目の前にあったのを見つけた時は。
いまや主流の高性能インテリジェンス・センサのおかげだ。
俺は、そのプログラムをウィルスに仕込み、ネットに流した。
『全ての人に、多世界を』 が合言葉だ。
すでに100%近く無線化されたデジカメに感染するのは、時間の問題だった。

「博士、これはどうしたことでしょう。
「うむ、これは多世界を写すデジタル・カメラじゃな。
「おー、そうするとこれは、ありえた世界を写すことが出来るカメラですか。
「いや、そうとも限るまい。この世界を写すこともあるようじゃ。
「そうじゃなくて、どうしてこうなったのかですよ。
「うむ、量子コンピュータチップでインテリジェンス化されたイメージ・センサを
うまく利用したプログラムが組み込まれているようじゃな。
「それって、ウィルスですか？
「そうとも言えるな。それにしても、実に見事なプログラムじゃ。
「博士、そんなことより、解決方法は。
「簡単じゃよ。ワクチンプログラムを作ればよい。。。ほら出来た。
「え、こんな簡単に。
「驚くほどのものでもない、ファイアーウォールを巧妙に避けてはおるが、
おそらく、単一品種じゃ。判ってしまえば、簡単なものじゃ。
だが、写っているのがこの世界である必要は、あるのかね。
「えっ。
「カメラとは、本来、見たいものを写す道具じゃないか。わしは、多世界の
方が見てみたいが。。。。」

かくして、ウィルスは取り除かれた。が、ウィルスを残したまま、多世界を
撮り続ける愛好家も少なくなかった。そのため、人々の疑いは晴れなかった。
この写真はこの世界か？ 誰もが、自分の写真を疑うようになった。
フィルムカメラの復活が始まった。

「誤動作」

助手：博士、見慣れないロボットですね。

博士：うむ、新しく開発したティーチング・ロボットじゃ。

助手：へー、何を教えてくれるんですか？

博士：今起動するから、ロボットの後ろで何か動いてくれたまえ。

助手：はい、いいですよ。。。お、ロボットが動き出しましたよ。

あ、私と同じ動きをしています。博士、これはどうなっているのですか？

博士：君の動こうとするニューロン発火を検出して、動きを推測しているのじゃ。

これで、簡単に人間の動作を教え込めるはずじゃ。

助手：すご〜い。。。あれ、私が止まっても動いていますよ。

博士：うむ。どうやらミラー・ニューロンまで読み取っているようじゃな。

「独白への序章．．．その後」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」

「うむ、これはな、．．．」

「は～か～せ～、また失敗ですね？」

「そんなことはないぞ。この方法ではうまくいかないという事がわかったのじゃ。

だから、これは成功なのじゃ。」

「博士、それって、エジソンの言葉じゃないですか？」

「誰が言っても同じことじゃ。さっ、次の実験にとりかかるぞ。」

「はい、博士。それにしても、次から次へとアイデアが出てきますね。」

「うむ、日頃から感受性を高めて、発想しておれば、誰にでもできることじゃ。

そこから創造に至るには、ちと、努力がいるがな。好きこそ物の上手なれじゃ。」

「博士、ご謙遜を。でも、たまには、成功したいですね。」

「だから、失敗じゃないって、」

「だいふ、助手らしくなってきたわい。」

「自己主張」

「は〜か〜せ〜、なんですかそれ？」

「これは、自動文章作成機能付きタイプライターが打ち出した文章じゃ。」

「あれは、確か無限ループに入って、そのままだったはずでは。」

「うむ、あれから改良を加えたのじゃよ。」

「へー、どんなことを書き出したのですか？」

「これが、最初の分じゃ。」

「高さ1.6Kmのビルディングは、世界最大。それ自体では支えきれず、四方の塔からワイヤーでつられた構造になっている。建設途中に、人工衛星から見たその姿から、バベル-Xと名付けられていた。今や砂漠の一大観光地である。そして、・・・

「ふむ、ふむ、」

「で、次がこれじゃ」

「高さ1.6Kmのビルディングは、世界最大。それ自体では支えきれず、回転ジャイロ型反重力装置がビルディング内部に設置され、浮遊しているように見えた。バベル・フロートと呼ばれたその勇姿は、今や砂漠の一大観光地である。そして、・・・

「なるほど、なるほど、」

「その次が、、、これも、だめじゃな。」

「え、どうしてですか？どれも、バベルにかかわる似たような話だけど、無限ループには入っていないし。一応、成功じゃないですか。どんな改良をされたんですか？」

「それなのじゃよ。新たに作った言語を組み込んだのじゃ。Blending Assertion and Brushing up Entanglement Language、通称BABELじゃ。」

「・・・それが、自己主張しているってことか。。。 」

「虫型ロボット．．．再び」

助手：博士。また新しい発明品を作ったと聞きましたけど。

博士：うむ。これじゃ。虫型ロボット群、ん、口をふさいでどうしたのじゃ。
は、は一ん、口から入のを警戒しておるんじゃな。心配はいらんよ。
ほれ、この通りじゃ。

博士、自分の口の中に何か放り込む。

助手：よかった。博士のおなかの中なら大丈夫ですね。わーっ、ごくん．．．
やられた、また、飲み込んだじゃいましたよ。

博士：大丈夫じゃ。心配はいらんよ。それより、握手じゃ。

助手：えー。なんでまた。

博士、強引に助手と握手する。

博士：このロボット群は単体では役に立たないが、人の体を伝送経路にして
お互いに通信し合い、最適協調を図るのじゃ。ほら、虫がさわがんか？

助手：そういえば。博士、おなかが空きましたね。何か食べに行きましょう。

博士：おお、そうじゃろう、そうじゃろう。

助手：また、いい飲み屋を見つけたんですよ。今日は、博士のおごりで一つ。

博士：うむ。虫がよすぎたようじゃな。

「うるさい塵」

助手：博士、スマートダストってご存知ですか？

博士：あー、知っとるよ。まだ、その辺にあるじゃろ。

助手：え、博士。入手していたんですか？

博士：何を言っておる。あるのは、わしが作ったやつじゃ。その頃、スマートダストなんて名前は知らなかったがな。

助手：でもそんな発明、聞いていませんよ。あ、失敗作ですね。

博士：わしの発明に失敗作はない。

助手：はい、はい、それは前に聞きました。

博士：そうだったかのー。じゃが、ちゃんと動くぞ。光、熱、振動、あらゆるものをエネルギーに変え、その状態をセンサ・ネットワークを通じて発信するのじゃ。もちろん、塵のように漂うくらいの小ささじゃ。

助手：すごいじゃないですか。その辺にあるということは、今も動いているんですね。

博士：いや、今は止めてあるよ。

助手：え、どうしてですか？

博士：このセンサは、塵のように漂う。それだけ小さいだけに、場所を特定させず、多量にばらまいて使うのじゃ。当然、体の中にも入り込む。当然このセンサは、体の中でも動くのじゃ。体の中の熱や振動を捉え、エネルギーに変えて、その状態を発信する。そこまでは良いのだが、体の中は変化に富んでおる。お蔭で、多量の情報が出回り、センサ・ネットワークがオーバー・フローするのじゃ。数が少なければ、問題ないのじゃがな。だから、今は通信を止めておる。

助手：ずいぶんと騒々しいセンサだったんですね。

「実験材料」

助手、急いだ様子で部屋に入ってくる。

助手：博士、お呼びになりました。わっ、なんですかこの馬鹿でかいタンクは？
人が入れそうですね。

博士：うむ、これは、再生治療カプセルじゃ。例え手足を切断するようなことになっても、このタンクに入れば、元通りになるのじゃ。

助手：え、そんなことが可能なんですか？

博士：もちろんじゃ。人間でも指先くらいなら適切な処置で再生することが知られておる。このタンクは、それを促進させる液体で満たしてあるのじゃ。

助手：ほんとですか？

博士：信じておらん。傷ができると、皮膚の一部である真皮由来の線維芽細胞が細胞間物質を生成し傷口をふさごうとする、それが再生の妨げになっておるのじゃ。それを抑制する酵素を、このタンク内の液体に入れてある。

助手：でも、それでは、傷口がそのままじゃないですか。

博士：慌てるな。止めるとは言っておらん。抑えると言ったのじゃ。それにここから、本番じゃ。液体には、骨髄由来の線維芽細胞を再生芽に変化させるm-RNAが入っておる。くわえて、中の液体は、細胞形成に必要な栄養素が、絶えず供給される循環システムと繋がっておるのじゃ。これで、短時間に再生が完了するはずじゃ。

助手：す、すごいじゃないですか、、、 「はず」って、実験は終わってますよね？

博士：これからじゃよ。

助手：え。

博士：装置はできたが、実験はこれからじゃよ。

助手：ま、まさか。

博士：うむ、すまぬが、適当な手足を切ってこのタンクに、

助手：わー、、、

助手、部屋から逃げ出す。

博士：まったく、どうしたのじゃ。手足の切断を頼もうと思ったのに、この猿の。

博士の後ろの箱から、猿が顔を出す。

「独白」

「は～か～せ～、なんですかそれ？」
いつもそう言って来た助手に答えることが、博士の楽しみだった。
いや、彼にそう言うってもらうために、発明を続けて来たのかもしれない。
その助手も度重なる失敗にあいそをつかし、ついに入入りしなくなっていた。
それにもめげず発明を続けた博士も、その寂しさを紛らわすためにロボット
を作り、いつも同じ言葉から始まる会話をさせていた。

「は～か～せ～、なんですかそれ？」．．．と。
そして今度はそのロボットとの会話にささえられ、次々に発明を産み出して
いった博士も、もうこの部屋を訪れることは無くなっていた。
答えるものが誰も居なくなったこの部屋で、ただロボットの声だけが響いて
いた。

「は～か～せ～、なんですかそれ？」．．．

「実証手段」

「博士、何の実験の準備ですか？」

「あー、これは、電子線バイプリズムを使った二重スリット実験装置じゃ。

「今さらそんな実験をしようとするのですか？」

「ただの二重スリット実験ではない、量子コンピュータを使った軌道予測実験じゃ。

「えっ、そんなことが可能なんですか？」

「わしに不可能は無い！ 予め電子線の軌道は、電子の動きで生じる電界変化で捉えてある。その軌道を元に、着地点を予測するのじゃ。無論、通常のコンピュータでは、計算が追いつかん。そこでわしの作った量子コンピュータが必要となるのじゃ。

「でも、電子軌道を計測したら、干渉縞は出来ないんじゃないですか？」

「そんなことは無い。そもそも計測した効果が電子に戻る早さも光速を超えることは無いのじゃ。だから十分に離れた場所で電界を計測すれば、計測されたことに電子が気付く前に干渉縞を作るのじゃ。実際、この通り干渉縞が計測されておる。もちろん、その軌道は確率分布にそって変移しておる。干渉縞を作ったのじゃからな。通常のコンピュータでは、その確率分布を出せるのが関の山じゃ。じゃが、わしの作った量子コンピュータは、予め計測した膨大な軌道データから、最も確率の高い軌道を算出するのじゃ。

「博士、その前に、電子軌道を計測できること自体がすごいことじゃないですか？」

「何を言っておる。そんなことは、わしの量子コンピュータの性能を実証するための手段にすぎんよ。それより、実験を始めるぞ。準備を手伝いなさい。

「あっ、はい、ただいま。。。

「夢見る機械」

「博士、何を見てるのですか？」

「あー、これか。わしの夢を見ようとしているところじゃ。

「え、博士の夢って、発明することじゃないんですか？」

「そっちの夢じゃない。寝ている間に見る夢のことじゃ。

「なーんだ。。。じゃない、どうやって見られるのですか？」

「このヘアーストタイプMRIで脳内のシナプスの動きを捉えるのじゃ。夢は現実世界と脳内世界を一致させるためのいわばシミュレーションじゃ。しかし、シミュレーションといっても使っている脳内部位は一緒じゃ。脳内世界で考えたことをそのまま行動に繋げるわけにはいかない。夢の中の動きで体が動いたら、危険極まりないからな。だから、夢を見ているレム睡眠中は、体の運動器官へのシナプスの動きは、制限されておる。逆に言えば、制限されるまでのシナプスの流れを捉えれば、夢を追跡することが可能なわけじゃ。それを昨日完成させて、わしの夢を記録しておいたのじゃ。

「すごい！そのヘアースト型MRIは、大発明ですね。

「何を言っておる。そんなものは夢を見るための手段に過ぎんわい。さてと、解析が終わったようじゃな。昨晚の夢を見ることにしよう。

『博士、何を見てるのですか？』

『あー、これか。わしの夢を見ようとしているところじゃ。

：

「博士。。。夢の中で、この自慢話をしようとしてましたね。

「魔法の装置」

「博士、今度の発明は何ですか？

「あ〜、これか。これは、言ってみれば、魔法の装置じゃな。

「えっ、博士、どうしたんですか？ 気は確かですか？

「わしは正気じゃよ。だから、言ってみればといったのじゃ。優れた科学技術の賜物は、魔法と見分けがつかんからのう。

「あっ、それ知ってますよ。アーサー・C・クラーク氏の三法則の一つでしょう。

「誰が言っても同じことじゃ。これは、口語入力インターフェイス付多世界任意選択装置じゃよ。

「はあ。それで何が出来るんですか？

「わからん奴じゃな。話したことが起こりうる任意の世界を多世界の中から選択する装置じゃ。

「それは、つまり、言ったことがそのまま実現するということですか？

「ま、早い話、そういうことじゃよ。

「アイスクリームよ、いでよ。

「あっ、何を言い出すんじゃ。

「えっ、アイスクリームが食べたかったの。。。でも、なにも出てきませんね。

・・・

「動いておる。

「だから、何も起きていませんって。

「動き出したのじゃよ。アイスクリームが出現する世界へとな。迂闊に止めると何が起こるか分からんからな。口語入力インターフェイスが、完璧すぎたようじゃな。わし専用にしておくべきじゃったよ。

「博士。どこにも、アイスクリームなんて見えませんよ。

「どんな装置でも無から有を生み出すことは出来んよ。アイスクリームを出現させるには、その質量に見合ったエネルギーが必要じゃ。あらゆる自然エネルギーを取り込める装置にはなっておるが、この環境下でアイスクリームに相当するエネルギーを得るには、相応の年数が必要じゃ。エネルギーさえ集まれば、アイスクリームが出現する世界が選ばれるはずじゃ。それまでは、このままにして置くしかないか。どれ、次の発明に取り掛かるとしよう。

「だから、博士、、、

人知れず朽ち果てた廃墟の中に、突然アイスクリームが現れた。しかし、その価値を知る者もなく、しばらくして溶けてなくなってしまった。

「一寸先は、」

助手、見慣れぬ装置を手取る。

助手：博士、これは何ですか？

博士：あー、それは、未来を写すカメラじゃ。

助手：ほんとに写るんですか？

博士：当たり前じゃ。量子コンピュータを使って、ありうる状況を全て走査し、その中からランダムに選んで、記録するのじゃ。

助手：えっ、それじゃ。実際に起こるかどうかわからないじゃないですか？

博士：記録するということ自体が、状態に作用を及ぼすのじゃよ。結果として、記録した状態に収束するのじゃ。

助手：それって、写ったことが本当になるということですか？

博士：そうじゃよ。

助手：博士は、使ったことがあるんですか？

博士：当然、試しておるわい。どうじゃ、試しに撮ってやろうか？

助手：・・・写ったことが良いこととは限りませんよね？

博士：当然じゃ。さてと、準備はよいか？

助手：えっ、いやー、ちょっと用事を思い出しました。

助手、退場する。

博士：なんとも、臆病な奴じゃな、、、

未来といっても、この装置程度のエネルギーでは、せいぜい1秒じゃ。

しょせん、写真に写るものなんて、過去になってしまうものじゃ、、、

目次：とある会話

何気なく聞き耳を立てると、

「とある日常」

「とある街角で」

「インテリジェンス」

「それって、詐欺？」

「時間よ、止まれ」

「ラブ・フォーティ」

「どちらを選んでも」

「作戦会議」

「熱くて冷たい？」

「失われた能力」

「姉貴の問題？」

「とある日常」

「きりーつ！」

「おはようございます。」

「れい！」「おはよー」「おはー」「おっす」「・・・」

「ちゃくせき！」

「さあ、今日はどこからはじめましょうかね

「え、200ページ。そんなに進んでいるなら、授業を受けなくてもいいですよ。

静かにしていきましょうね。

「2ページ？じゃ2ページを開いて。。。って、目次じゃないですか？

「なに、冗談ですって。はい、はい、わかっておりますよ。はい、それでは、

昨日の続き、100ページから始めましょう。

「えっ、まだ早いですか。復習も予習もやっていなかったのですか？

「あなたのおうちが大金持ちなら問題ないですよ。あなたが勉強しなくて、大抵のことはできますからね。

「えっ、そんなことはない。もし、ご謙遜でないなら、よく考えておきましょうね。

「今の社会は、試験天国ですからね。試験さえ通れば、大抵許されますけど。

通らないと、できることは極端に限られますからね。

「とはいえ、勉強ができないからといって、生きていけないわけではありませんよ。

それなりの生き方もありますからね。

「えっ、ご両親に告げ口されるって。先生は全然構いません。でしたら、アドバイス

させていただきますが、教室内での言動は、全て録画されております。ですから、

それ使って、ご両親に話されることが本当であることを、簡単に証明できます。

とても良いシステムでしょう。

「・・・」

「はい、では、授業を続けてよろしいですか？ 100ページを開いて。。。」

「とある街角で」

- 「え、暑さ、寒さはどうしてるかって。そうりゃー、暑い時は、木陰で涼みまさあ。
- 「樹は、えらいですよ。暑いから寒いからと文句を言いませんし。それに、紙は、木と一緒にですからねえ。ダンボールで作った家は、木で作った家と同じでさあ。だから、ダンボールにくるまって、寒さをしのげるってもんですよ。
- 「食べ物はどうしてるかって。そうりゃあ、フリーガンと一緒にさあ。
- 「え、フリーガンを知ってるのかって。ま、当てずっぽうですがねえ。いえね。この前、外人さんが、あっしらを見てそう言っていたんでね。
- 「え、ずいぶんとエコ生活だって。エコって、エコノミーのエコですかい？え、違う？
- 「エコロジーのエコ？エコロジーって、あの生態学のことですかい？
- 「生態学なんて知らない？そうですか。言葉は変わっていきますからねえ。それじゃ、どう意味なんで？
- 「環境にやさしい？地球に負担をかけない？そういう生活を目指されている？そりゃ、あっしらは、火も電気も、必要最低限しか使いませんがねえ。まあ、使っていないというよりは、使えないといった方が当たっていると思いますが。それで、あんた方は、何を調べていなさるんで？
- 「民俗誌学の勉強の一環。そりゃ結構なこと。すると何ですかい、これはフィールドワークってやつですかい？
- 「えっ、民俗誌学を知っているのかって？まあ、昔色々ありましたね。そうですか。あっしらをフィールドワークねえ。で、それをどう使いなさるんで？
- 「え、あっしらの社会復帰のため。そりゃあ、いい。戻りたがっている連中は多いですからねえ。そうですか。。。それで、一つお伺いしてもいいですかねえ？
- 「あんた方は、あっしらの生活をエコ生活だと仰る。つまり、地球に負担をかけない生活だと。あっしらはそれを考えて生活してるわけじゃないですがね。そんでもって、あんた方の社会は、それを望んでいるとは言っても、エコ生活なんてほど遠いように見えるんですがねえ。
- 「ええ、あっしなんか言えた義理じゃありませんけど。けど、あっしらを社会復帰させるってことは、エコ生活しているあっしらを、エコ生活していない社会に戻す。それが、あんた方のやりたいことなんで？

「インテリジェンス」

「兄貴、アメリカにはCIAって組織があるよね。日本には無いの？」
「あるよ。内閣情報調査室ってやつさ。」
「それって、この前、10万円かそこらで外国に情報を渡しやつが、所属していた所でしょ。やっぱり日本人には、そういう諜報機関は向いていないのかなあ。」
「今の日本はそうかもしれないけど。戦国時代には、伊賀や甲賀のような忍者集団がその役目を負っていたし、日本人には、というのはあたらなないよ。」
「でもそれは、国内だけでしょ。CIAみたいに国際的じゃないよね。」
「なんだ、そういうことか。国家レベルで、見事に外国をだまし果せた例は、あるよ。ちゃんと証拠も残ってるし。」
「え、そんな証拠があるの。まさか、兄貴、真珠湾攻撃だとか言うんじゃないよね。」
「そんなこと、言わないよ。第一、それは事前に察知されていたというのが定説だよ。証拠というのは、『魏志倭人伝』さ。」
「え、あの邪馬台国の話。」
「そうさ、『魏志倭人伝』の記述だと、邪馬台国は実在しない場所になる。だから、その解釈をめぐって、論争の種になっている。ここまでは知っているよね。」
「うん、知ってるよ。九州説や畿内説がその代表でしょ。それがどうして、証拠に。」
「それには、その時代について考えておく必要がある。正しい地図は、戦略上重要な情報だ。それがあれば、易々と攻め入ることが出来るからね。今みたいに人工衛星がなければ、簡単には手に入らない。実際、古代中国で、領土の地図を渡すということは、その領土を渡すことと同じ意味だったんだ。ここまではいいかい？」
「うん、わかるよ。でも兄貴、証拠の話は？」
「まあまあ、あせるなって。ここで邪馬台国側になって考えよう。相手の中国、この時代は魏か、強大な国家であることを知っていたはずだ。攻められたら、たちまち征服されるくらいは推測していたと思うよ。その魏の使者が来ているわけだ。属国の奴国、博多あたりが定説だけど、ここまでは、韓国から対馬を通過してすぐだから隠しようがない。でも、本体の邪馬台国の場所は、隠しておきたいだろう。当時、孫子の兵法はすでに確立している。当然、日本にも伝わっていたと考えておかしくない。とすれば、偽の情報で、はぐらかすくらいの事は考えたはずだ。“始計編”にある“兵は詭道なり”さ。実際に攻められて、『魏志倭人伝』通りに進軍しても、海に至って、邪馬台国はどこだ？ってことになるからね。つまり、欺かれたままに『魏志倭人伝』は書かれたのさ。おまけに、現代人も騙されたままってことだね。」
「うーん。だとしたら、何で、魏に使者を送って貢物したのさ。知られないように、していればいいのに。」
「ここでも、孫子の兵法が重要なのさ。当時邪馬台国は、属国とうまくいってなかったと思うよ。当然、戦争は避けなければならない。孫子の教えるところだからね。その解決方法として、魏の国による権威付けに頼ったんじゃないかな。倭、つまり日本を治めるは、邪馬台国の卑弥呼だと。実際、親魏倭王に任ぜられたしね。そうすることで、卑弥呼に逆らうのは魏に逆らうことだ、と思わせたかったんじゃない。それで、大人しくなればよし。内乱になったら魏が攻めてきて、真っ先にお前達が攻略されるぞってね。“謀攻編”の“戦わずして勝つ”というやつさ。」
「ふーん。でも、孫子の兵法って戦うための方法論じゃないの？」
「そんなことはないさ。読めば判るけど、“始計編”の最初で“戦争は、国家の存亡にかかわることだから、慎重を期せ”と説いている。“謀攻編”では“百戦百勝は最上ではない”とさえ言っている。最上は、さっき言った“戦わずして勝つ”さ。」
「へー、そうなんだ。でも、そうすると邪馬台国の本当の場所はどこになるの？」
「普通に考えれば、九州ではないだろうね。『魏志倭人伝』に書かれている場所から、離れたところ。。。それについては、[いい本](#)が有るよ。これを読んでごらん。」
「え、何々。このタイトル、そのまんまじゃない。。。えー、そんなー！」
「事実は、小説より奇なりさ。」

「それって、詐欺？」

「兄貴、最近の暖かいのは、やっぱり、地球温暖化ってやつだよな。」

「ま、そうだろうね。でも今頃、どうしたんだい。」

「いやー、こないだテレビを見て、CO₂削減に取り組まなきゃだめかなーと思って。」

「ふーん。CO₂が温室効果ガスであることは、知ってるんだ。」

「兄貴、当たり前だろ。それくらいは、知ってるよ。」

「それじゃー、最大の温室効果ガスは何か知ってるかい？温室効果の7、8割以上を担っている気体だけ。」

「え、CO₂じゃないの？」

「違うね。答えは、H₂Oさ。」

「H₂O。それって、水じゃない。」

「そうさ、気体の状態だから、一般には水蒸気と呼ばれるけど。」

「そんな。テレビでは、温室効果ガスの表が出てたけど、水蒸気なんかなかったよ。」

「そんなことはないさ。大抵そういった表には、注記が載っているんだ。『ただし、水蒸気を除く』ってね。」

「そ、それって、詐欺じゃない。」

「うそはついていないよ、注記があるから。詐欺にはならないね。気がつかない方がおかしいのさ。」

「それじゃあ、CO₂削減って無駄だってこと。」

「それは違う。俺が言いたいのは、CO₂より影響の大きい温暖化ガスがあるってこと。CO₂削減は多くの場合、エネルギー削減に繋がっているから温暖化対策になるのさ。でも、穀物からアルコールを作って燃料にするというのは、意味がないだろうね。」

「えっ、アルコール燃料って、始まっているじゃないの。」

「そうさ。でも、穀物は、直接アルコールにならない。穀物をアルコールにするため、多くのエネルギーが使われるんだ。植物由来のアルコールは、植物によって取込まれたCO₂を放出するから、良い燃料だとされている。でもアルコールにするために使われるエネルギーを作り出すのに放出されるCO₂は、どこでカバーするんだい？」

「それは、、、」

「それこそ、詐欺じゃないかな。CO₂にこだわり過ぎて、矛盾に気がつかないのかな？CO₂の増加であれ、エネルギーの使いすぎであれ、どちらにせよ、温暖化が起こっていることは、間違いないだろう。それを止めたかったら、エネルギーを出来るだけ使わないことさ。そうすれば、自ずとCO₂は削減できる。」

「でも、すべて原子力エネルギーにすれば、CO₂は出ないじゃない。」

「植物由来のアルコールと同じだよ。原子力発電にするのに、発電所の建設、燃料の精製・輸送、核廃棄物処理が必要だろ。これらをすべて原子力だけで行なえるかい。今の技術では、無理だね。例え出来たとしても、現在のすべての外然・内燃機関を原子力対応にするために、どれだけエネルギーが必要だろうね。そこまで、温暖化現象は、待ってくれると思うかい？」

「じゃあ、何をやっても無駄ってこと？」

「おいおい、それじゃ話が飛びすぎ。何も考えてないのと同じだよ。さっきも言ったように、エネルギーをなるべく使わない方法を考え、実行することが一番さ。代替エネルギーでまかなおうなんて考えずにね。」

「時間よ、止まれ」

「あ〜あ、早く恒星間宇宙船が出来ないかしら。」

「姉貴、いきなり、どうしたの。」

「だって、それに乗り込んで、遙かアルファ・ケンタウリまで旅して、戻ってくれば、あんたたちが年を取っていても、私は、若いままでいられる訳でしょう。」

「なに言ってるんだか。もし、光速宇宙船が出来て乗っても、往復9年はかかるんだぜ。俺たちがそれ以上歳とっても、姉貴が若いままな訳はねえよ。」

「えっ、そうなの。やっぱり、相対性理論なんて信じるんじゃない。だいたい、相対性なら、いくら私が高速で移動しても、私から見れば、あんたたちが高速で動いている訳じゃない。私だけが歳をとらないなんておかしいと思ったわ。」

「姉貴。鋭いことをさらっと言ってくれるね。でも、相対論がおかしいんじゃないよ。一般相対性理論を使うべき所に、特殊相対性理論を使ったからおかしくなったのさ。」

「まったく、ごちゃごちゃうるさいわね。どのみち、若いままではいられないでしょ。関係ないわ。」

「そうでもないよ。一般相対性理論で考えれば、宇宙船に乗って高速移動しなくても時間は遅くできるはずだよ。理論的にはね。」

「なによ。それを早く言いなさい。どうやって遅くするの。」

「それは、[この本](#)を書いてあるよ。数式を使わないで説明してあるから、姉貴向けさ。」

「うるさいわね。数式ぐらい私にもわかるわよ。さっさとよこしなさい。」

...

「うそつき。結局、無理じゃない。」

「うそはついてないよ。理論的にはね。実際に適用できるとは言ってないだけさ。」

「ラブ・フォーティ」

0-0

e-mail: どうして連絡くれなかったの!
二度のすれ違いが誤解の始まりだった。

0-15

e-mail: ごめん、仕事。
仕事のミスで対応に追われ、連絡が遅れたのが一つ目。
ダブル・フォルト

0-30

e-mail: 信じられない!
突然の豪雨で、交通機関がすべて止まったのが二つ目。
相手のボールがネットに当たり、俺のコート側に落ちた。

0-40

最悪の状況。ここで諦めるたら、終わりだ。
携帯: ハイ、
携帯: 今、XX駅の中
携帯: ソウダケド
携帯: 雨が上がったんで、迎えに来たんだ
携帯: エ、デモ、デンシャモ、バスモ、トマッテイルワヨ
携帯: いいから、駅の外に出てごらん
ファースト・サーブがいい位置に入り、サーブ・アンド・ボレーが決まった

15-40

「え、これは、二人乗り自転車!
「そうさ、レンタルしたんだ。これに乗って帰ろう。
「え、でも、この格好じゃ。
「ほら、着替えと靴。
「あ、ありがとう。

相手のドロップ・ショットは、予想してたので余裕で捌けた。

30-40

「ふう、気持ちいいわー。
「だろ、雨上がりだから、気温も下がったしね。
「なんだか、こうやって、二人で同じことするって、久しぶりね。
ようやく、サービス・エースが取れた。

40-40

さ、ここからが、本番だ。

「どちらを選んでも」

「ねー。夏祭りで、真珠のアクセサリーを当てたんだって。」
「姉貴、いきなりそれかよ。」
「いいじゃない、どうせプレゼントする相手なんかいないでしょ。
私が使ってあげるわ。」
「はいはい、そう言われると思って用意しましたよ、はいこれ。」
「え、なにこれ、箱三つ？」
「この箱のどれかに、真珠のアクセサリーが入っているよ。」
「どれも、同じに見える箱ね。何をするつもり？」
「どうせなら、ちょっと遊ぼうと思って。。。どれか一個だけ選んで。」
「いいわよ。。。じゃあ、これ！」
「ところで、その箱に入っている確率がいくつかわかる？」
「知ってるわよ、それくらい。3分の1でしょ。」
「そう、そして、残ったこの二つの箱に入っている確率は、3分の2。」
「それがどうしたよ。もう開けてもいいでしょ。」
「そして、この二つのうち一つを開けると、、、空でした。で、提案。
今なら、こっちの箱と交換できるけど、どうかな？」
「そっちの二つの箱に入っている確率は3分の2だった。その内一個
を開けると空。そして、こっちの箱に入っている確率は3分の1ね。
それで、そっちの開けていない箱の方が分がいいと言いたいわけ？」
「さすが、姉貴。ちゃんと気付いてるね。さあ、どっちを選ぶ？」
「結局、箱は二つ。どちらを選んでも、入っている確率は、2分の1。
箱を一つ開けた時点で確率は変わっているわ。それより、あんたが、
躊躇なく箱を開けるのを見て確信したわ。入っているのはこっちよ。」
：
「うそー、空だわ。何でー！」
「残念でした。姉貴の言った通り、どっちの箱も入っている確率は、
同じさ。ただし、2分の1でなく3分の1のまま、変わらない。
でもね、姉貴の取った箱に入っていない確率は3分の2。当然、残っ
た二つの箱に入っていない確率は3分の1。で、片方が空だと判った
のでこの箱に入っていない確率が、3分の1になったんだ。」
「なるほどねっ、、、と」
「あ、姉貴、何するんだよ。」
「結局、その講釈を聞かせたくてやったんでしょ。だから、その駄賃
にもらうわよー。」
「ちえっ。まったく、かなわないなー、姉貴には。」

「作戦会議」

「どうした。元気ないね。夏バテかい。

「あ、兄貴。今姉貴の買い物に付き合っ、帰ってきたとこだよ。

「なるほど、それはお疲れ様。

「いつもなら、兄貴と交互なのに、今年は、俺ばかり。おかしいよね？

「ま、それなりに贈り物してあるからね。

「え、でも、贈り物なんかしたら、ますますねだられるんじゃない？

「そこは、“彼を知り、己を知れば、百戦殆うからず。”。ひと工夫してあるからね。

贈り物とは思われていないけど、引け目は感じているはず。現に姉貴は、俺にいいつけないしね。

「孫子か。この前の話を聞いてから読んだけど。当たり前のことしか書いてないよね。今更って気がするけど。

「そうさ、書いてあること、一つ一つ見れば、当たり前のことなんだ。だから却って、現実のあり方に気付かないのさ。姉貴が買い物をする時、荷物持ちに俺らがいいつけられ、それを断りきれない。色々と弱みを握られているからね。これが現状だろ。

「そうだけど。それと、どう孫子の兵法が結びつくの？

「ここで戦いは、“いいつけられる”ことだ。いいつけられれば、断れない。つまり、勝ち目はない。だから、前にも言ったけど“戦わずして勝つ”に持っていくのさ。

「そんなことでできれば、苦労はしないよ。

「まあ、聞けって。状況からすれば、それがベストだとわかるだろ。

「そりゃあ、まあ、..

「じゃあ、“戦わずして勝つ”と考えたかい。

「。。。思わなかった。

「だろう。孫子の兵法を知っていても、自分の状況に結びつけることが出来なかったわけだ。孫子曰く“彼を知らず、己を知らざれば、戦うごとに必らず殆うし。”ってことさ。それに気がつけば、後は簡単さ。現に、姉貴は、俺に、いいつけない。

「それ、それ、なんで。

「だから、姉貴がいいつけられないような状況に持っていけばよさ。

「そんなことができれば、苦労はないって。

「状況を整理すると。姉貴の買い物には荷物持ちが要る。荷物持ちに適した俺たちがいる。ひとつは、姉貴が買い物をしないか、できない状況にする。ま、無理だね。

「だね。

「とすれば、荷物持ちの方だ。要するに俺達がいるから、姉貴もいいつけるんだらう。

「でも、“俺ら”は消せないよ。

「“兵とは詭道なり”にある“利にしてこれを誘い”さ。ほしいには、荷物持ちだろ。

つまり、別の荷物持ちがいればいいわけだ。

「俺と兄貴以外に？

「お前の友人で、姉貴のような女性がタイプの奴がいるじゃない？

「あ、そうか。あいつを紹介すればいいんだ。でも姉貴が相手じゃ、何日持つかなあ。

「たかだか一つの策で、未来永劫ってわけにはいかないさ。その状況に合わせ、また、考えればいいのさ。そのための“孫子の兵法”だもの。

「そうだね。早速メールしよっと。。。 :

「やれやれ、これじゃ、“孫子の兵法”が身に付くのは、まだまだ先だなあ。

「熱くて冷たい？」

「あら、あんたたち、何飲んでんのよ。
「あ、姉貴。アイス・コーヒーだよ。
「そんなの見れば判るわよ。私にも頂戴よ。
「残念でした。あいにく氷が切れてるんだ。
「何ですって。さっさと氷を作りなさいよ。
「といってもね。今入れたばかりだから、二、三十分はかかるよ。
「入れたばかり？まさか、あんた、水を入れたんじゃないでしょうね？
「そうだよ。当たり前じゃん。
「何言ってるの。お湯のほうが早く凍るのよ。これ、常識よ。
「え、兄貴、そうなの。
「常識かどうかは、知らないけど。最近じゃ、ムペンバ効果と呼ばれて有名ならしいよ。
「そんな馬鹿な。
「ほんと、あんたは何も知らないわね。さっさとお湯にと交換しなさい。
「わかったよ。。。はい、替えたよ。だけど、兄貴、何でそうなの。
「水が4℃で一番重くなるって知ってるかい？
「習ったように気がする。それで氷が水に浮かぶんだろ。
「ちょっと違うけど、まっいいや。じゃ、過冷却水は？
「それは知ってる。叩くと一瞬で凍るやつだろ。
「ちょっと、それとお湯が早く凍るのと、どう関係するのよ？
「なんだ、姉貴も理由がわかっている訳じゃないんだ。
「そんなことないわ。お湯を冷蔵庫に入ると、その温度に冷蔵庫のセンサーが反応して、冷気をたくさん出すんでしょ。それで、冷え過ぎるわけね。
「いい線、いってるかもね。でも、この効果を最初に言及したのは、アリストテレスとされているんだ。たぶん、その頃は、冷蔵庫はなかったと思うよ。
「なによ。どうだっていいじゃない。ようは、早く氷ができればいいのよ。
「ちょっと待って、話がずれてるよ。兄貴、何でお湯のほうが早く凍るのさ。
「そうだね。水が4℃で一番重くなる。つまり、一番詰ってる状態だ。それに比べて、結晶状態である氷は、整然と整列しているけど、スカスカの状態だ。だから密度が低く、水に浮いてしまう。
「だから、それとどう関係するのさ。
「ま、そう急ぐなって。考えてもごらん。ぎゅうぎゅう詰め満員の電車の人間をどうすれば、整列させられるかを。
「そりゃ、何人が電車から降りてもらわうしかないね。
「そうだよね。水で考えると水の分子にどいてもらわうしかない。でも、温度が低い、つまり、分子振動の低い状態だと、動きづらい。さらに冷却すると、ぎゅうぎゅう詰めのまま、温度が下がる。ぎゅうぎゅう詰め状態では、隙間がないから結晶化できない。つまり、水のままだ。これが過冷却なのさ。ここに、衝撃が加わえると水の分子が物理的に動かされる。満員の電車の電車の車体が外され、人間が吐き出された状態だ。すかさず、空いた席に人が座るってのは、冗談だけど整列できる隙間が出来たわけだ。それと同じように、開いた隙間で水は一瞬に結晶化する。
「でも、それならば、お湯からでも、水からでもおなじでしょ。
「いいとこつくね、姉貴。4℃の水で、こうなる事は、いいでしょ？
「いいことにしてあげるわ。
「お湯を冷やしていくと、お湯が一様に冷えていくわけではないよね。必ず温度と低い所と高い所が出来る。温度勾配ってやつさ。低い所では、一方は冷やされ、一方は温度の高い所と接している。温度の高い所では、水の分子振動が大きい。つまり、動きやすい。これが、結晶化に必要な隙間を作るのに役立つんだ。温度の高さが、隙間を作るのに役立つのさ。だから、ある程度の温度を保っている方が凍りやすい。たぶん、お湯じゃなくても、適度に細かく叩きながら、冷やせば、早く凍るよ。
「ふーん。でも、氷にならないけど過冷却状態になるんじゃない、結局、一緒じゃないの？
「そこが、この理論の弱点だよ。姉貴と一緒に、ようは、早く氷ができればいいさ。でも、気になるなら、[Wikipedia](#)があるよ。。。ほら、これ。
「なんだ、兄貴。先にそう言ってよ。。。へー、こんなことも書いてあるんだ、、、

「失われた能力」

「兄貴、犬に超能力があると思う？

「いきなり何言い出すんだい。鼻がいいとか、超音波が聞こえるってことかい？

「違うよ。この前、伯父さんの家に行った時、ジョンが急に玄関に向かったの見て、叔母さんが、伯父さんがもうすぐ帰って来るって言うんだ。それで、訳を聞いたら、ジョンが玄関にお迎えに行って5分後にいつも伯父さんが帰って来るっていうんだ。

「ふーん、で、どこが不思議なんだい？

「えっ、だって、伯父さんの家の中からは、帰って来る足音は聞こえないし、匂いも嗅げないはずだよ。しかも、帰る時間が決まってるわけでもない。それでも判るのは、テレパシーとかいう超能力があるからじゃないの？

「犬が主人の帰りに気付いて迎えに行くのは、よくある話さ。不思議なことじゃなく、それは能力だよ。それを超能力と呼ぶのは、勝手だけど。定義の問題かもね。

「それじゃ、ジョンが伯父さんの帰りをどうやって知ることができるのさ？

「ああ、それなら、多分、説明できるよ。足音で、誰が来るかが判ったりするだろう？

「うん、姉貴が来るのは、足音でわかる。

「それって、履物の出す音の違いじゃなく、足音のパターンで判るんだよね？

「うーん、言われてみれば、履物が違っていても、大体判るね。でもジョンに足音は、聞こえていないはずだよ。

「あせるなって。つまり、歩き方にその人特有のパターンあるというのはいいよね。そのパターンに何らかの手段で気付けば、その人を特定できるわけだろ。それは、犬でも人間でも同じだよ。

「そうだと思うけど。その、何らかの手段って何さ？

「おそらく、電磁波だね。

「電磁波？ 人の体から電波が出てるの？ そんなバカな？

「じゃあ、電磁波がどうやって発生するのが知っているのかい？

「うっ、でも、絶対、電気とかが要るだろ。人の体のどこに電気があるのさ。

「電磁波は、電界を変化させれば発生する。アンテナは、それにかかる電圧の変化に応じた電波を発生させている。電圧の変化は、電荷の移動で生じる。つまり、電荷を動かせば電磁波は発生するのさ。量は別にしてね。

「で、どこに電荷があるのさ。

「おいおい、人に限らず、地球上で生命といわれているもののほとんどが、電解質でできている。つまり電荷の塊だよ。当然その周りには、微弱でも電界が生じている。それが、動くんだ。量はともあれ、電磁波は発生しているよ。それを感じる能力が犬にはあるという訳さ。それを超能力と呼ぶならかまわないけどさ。

「そうかなあ。それなら人にもあってもよさそうなものだけど。

「あるんじゃない、忘れてるだけで。昔、剣豪と呼ばれていた人は、気配や殺気を察知することができたんだ。多分、厳しい修行で失われた能力を取り戻したのさ。

「姉貴の問題？」

「兄貴～。姉貴って、二重人格だよな。

「一体、何を言い出すんだい。後ろに姉貴がいるよ。

「えっ！．．．なんだ、嘘か。脅かさないでよ。でも、兄貴もそう思うでしょ。

「それは、二重人格の定義によるさ。定義次第では、お前も二重、いや多重人格だよ。

「俺が、そんな馬鹿な！

「そうかい。じゃあ、聞くけど、お前だって、寝ているとき夢を見るだろう。その時、誰かと話をしたりしないかい。

「そりゃ、するよ。昨日見た夢には、姉貴まで出てきちゃったよ。

「夢の中の姉貴は、現実の姉貴そっくりだったかい。

「もちろん。夢の中くらい、俺の言うことを聞いてくれても良さそうなのに。

「そう思うだろうね。ところで聞くけど、夢で見た姉貴は、どこに居るんだい。

「えっ、どこに居るって、．．．夢の中さ。

「そう、お前の夢の中だよな。でも、本物の姉貴がお前の夢に割り込んできたのかい。

「そんなはず無いよね。とすれば、お前の頭の中に姉貴の人格があるってことだろう。

「あっ、

「夢の中でもお前の言うことを聞くわけじゃない。お前とは、独立しているんだよね。

お前だけじゃないさ。大抵の人は、自分自身の人格、主人格と呼ぼうか。主人格を作るように、自分以外の人格も頭の中に作っているのさ。ただ、起きている時は、表立ってそれらの人格が出てくることはあまりない。でも夢の中では、一個の人格として現れ、主人格と話をする。それを、夢として思い出すのさ。

「えっ、そんな簡単に人格って出来るものなの。

「簡単だとは言っていないさ。じゃあ、聞くけど、どうやって主人格を作ったか説明できるかい。

「うっ、それは、．．．

「よく車を運転する時、人が変わる人がいるって言うだろう。あれも同じだよ。車を運転するという環境で、頭のほうが勝手に車運転用の人格を作ってしまったのさ。

運転中、主人格がおろそかだったのかもね。

「じゃあ、二重人格者の定義というのは、主人格以外の人格が現れる人ということ。

「かもね。でも、車を運転して人が変わる人を二重人格者というかい。役者が役作りするのと同じことかもしれないよ。

「ちょっと待って。俺は、姉貴の事を聞いているんだ。話をそらさないでよ。

「私の何が聞きたいって、

「あっ、姉貴。いつの間に、．．．

目次：！

一体何が起こるのか？
わからないのが世の中、なんてね！

[「玄妙なる調べ」](#)

[「不協和音」](#)

[「最後の日」](#)

[「妖精養成研究所」](#)

「玄妙なる調べ」

彼は天才だった。偉大な演奏家だった。

奴は天才だ。いやになるくらいに。奴は、あらゆる楽器を演奏できた。いやそうではない、奴の手にするものが楽器になるのだ。俺は奴を尊敬し、嫉妬しながらもマネージャーをしていた。

人々は、彼の沈黙を不思議がった。そして、再び彼が出てくるのを待ち望んだ。

奴が、別荘に籠ったのは初めてだった。別荘にこもる前、奴はこう言っていた。「面白いものを見つけたんだ。次に会うときには、それを演奏してみせるよ。」俺は、ついに奴にもスランプがきたかと思った。だってそうだろう、奴にとって別荘に籠ってまでやらなきゃ演奏出来ないものなんてあるはずがないじゃないか。

彼は、あるストリング（弦）に魅せられていた。そして、それを演奏することに情熱を傾け始めた。彼には、ありあまる才能と資金があった。

奴から連絡をもらうと、俺はすぐさま別荘へと向かった。誰よりも早く奴の初演を聴ける。これが俺の役得であり、マネージャーを続ける理由だった。

ついに彼は、ストリングを奏でる方法を編み出した。ストリング、それはスーパー・ストリング（超弦）と呼ばれていたものだった。

別荘に入ると奴は真新しい奇妙な機械の前に立っていた。これが新しい演奏装置だという。俺は言った。「どこにストリングがあるんだい。」奴は答えた。「何処にでもあるんだ。．．．演奏してみせるよ。君が来るまで、演奏しないで待っていたんだ。」それこそ俺が聞きたかった答えだった。

彼は、超弦を奏ではじめた。．．． 世界が崩壊した。

「不協和音」

無から有が生まれ、世界が始まった。
そして、調和とともに、大きくなっていった。
突然、対称が破れ、そして混沌が始まった。

タクトが譜面台を打った。
「君々、何だねその音は。せっかくのハーモニーが台無しじゃないか。
名演奏になったかもしれないものを。不協和音を入れるなんて．．．
もういい。今日はこれまでだ。諸君、解散してくれたまえ。」
ステージはざわついていた。団員たちは三々五々にステージを去っていった。
やがてステージには、静寂だけが残った。

かくして、世界は無へと向かった。

「最後の日」

とっさに体が踵いた。目の前には、トラックのフロントガラスがあった。

40年。長いものだ。期待と不安を抱いて初めて歩いたこの道も、もう歩くこともあるまい。明日を夢見ていた二〇代。自信にあふれていた三〇代。清濁あわせ飲んだ四〇代。失望の、しかしあきらめきれなかった五〇代。その間、一日も休まず、ただひたすら歩き続けたこの道を、最後の日になって周りを眺める余裕ができるなんて。ふと見るとよちよちある子供が、猫を追って道に出てきた。その時、トラックの警笛がなった。振り向くとトラックが直前まで迫っていた。

とっさに体が踵いた。子供を抱き上げた。振り返ると目の前にはトラックのフロントガラスがあった。

ガシャーン。トラックが大破した。恐らく運転手は助かるまい。不景気で退職金代わりとなったこのボディには、傷一つなかった。

事故を通報して取り調べを受けていたら、うまくいっても遅刻は免れまい。無遅刻無欠勤のこの俺が、よりによって、最後の日に、遅刻するなんて。

「妖精養成研究所」

え、これが何かって。私の秘書さ。そうりゃあ、もう、優秀だよ。なんてたって、私が育てたんだからね。どこで手に入れたんだって。馬鹿を言っちゃいけないよ。私が育てたと言っているだろう。嘘なんかじゃない、本当の話さ。え、君もほしいって？それならそうと先に言ってよ。それじゃ教えてあげようかね。この始まりは、

“妖精養成研究所”という看板を見た時は、冗談かと思ったさ。いつもの道を外れた小道に入ったのは、ただの気まぐれだった。たまには、違った道を通ってみようと思ってね。そこで見つけたんだ。くだんの看板を。そのまま通り過ぎてよかったが、どうにも気になってね。意を決して入ってたんだ。入ってみると、小綺麗な事務所といった感じで、一人の女性が近づき話しかけてきた。

「いらっしゃいませ。妖精養成研究所へようこそ。どのようなご用件でしょうか？

...

「あの～、ただの冷やかしですか～。お帰りは後ろのドアからどうぞ。

「いやー、実は、

「実は妖精を育てるのは初めてで、戸惑っている？そうでしょう。そうでしょうとも。誰でも初めは戸惑うもの。でも、ご安心下さい。当研究所のサポートをご利用になれば、どなたでも安心して妖精を養成することが可能です。お客様、こちらへどうぞ。

私は、言われるがままに、案内されたソファに座った。新手の詐欺商法に捕まってしまったのかと、後悔しながらね。

「それでは、どのような妖精をお持ちですか？

「あ、いやー、それが、、、

「まだ、持っていらっしゃらない？それでしたら、お客様。実に良い機会ですよ。今日入荷したての妖精をご紹介します。どうぞ、そちらをご覧になりますか？

「はー、

「それでは、少々お待ちください。

と言いつつ、彼女は、隣の部屋とさっさと入っていったんだ。ここで帰ってしまえばよかったんだが、どうにも入荷したばかりという妖精が気になってね。だまされると思いつつも残ってしまったんだ。そしてその後紹介されたのが、この妖精なのさ。

え、結局のこの妖精は何かって。見ての通り、ホログラムさ。ホログラム発生装置に指向性マイクとスピーカーがついていて、会話が可能なんだよ。何でも、[ヌメンタ](#)とかいうアーキテクチャを使ったAIみたいなものを組み込んであるらしいよ。といっても、最初から会話ができるんじゃない。文字通り育てないといけないんだ。物語を読み聞かせたり、日常に起こったことを話したりしてね。ある程度、それを続けていると会話ができるようになる。といっても、最初は全然トンチンカンでね。そのあたりで、一度、研究所に持っていくと調整してくれるのさ。後は、何でもいいから思いついたことや、用件をすべて話しかけておくんだ。そうしておくで、必要な時に、予定やら案件やらを教えてくれるんだ。そうしてほしいと頼んでおけばね。アドバイスも気が利いている。今ではこいつ無しでは、やっていけないくらいさ。

目次：？

人にあらざるもの。それは、

「夢の中で」

「目算め」

「暗くなるまで待つて」

「最終手段」

「強制停止」

「理想郷」

「夢の中で」

眠りから覚めたようだ。何も見えず、何も聞こえない。どれくらい時間が経ったのだろう。もはや時間さえ、解き明かしたのに。．．．そう、あの時から。

私は死の床にあった。見知らぬ男が、奇妙なことを言うのが聞こえた。
「ご心配なく。あなたの偉大な頭脳は、我々が必ずお守りします。」

「ご臨終です。」という声を聞いたのが、最後だった。次に眠りから覚めた時、私の五感も、もはや何も感じる事が出来なかった。眠りのなかで見る夢が、私の生きていく支えだった。そう、論争できるのは夢の中だけなのだ。しばらく待てばまた眠ることができる。今度こそ、ニールズに勝って見せる。

いつものようにガラスの容器の中に液体で浸された脳があった。循環器で常に酸素・ブドウ糖・ミネラル等が供給されている液体を、今日は点検で入れ替えるのだ。毎度のことながら、入れ替えの時、脳が身震いするように見えるのは気のせいだろうか。俺は作業を続けた。

「目覚め」

貪るように食べた後、俺は猛烈に眠くなった。眠りの準備を始め、眠った。陽射しの暖かさで目が覚めた。長い眠りだったようだ。眠りの準備で用意した覆いで何も見えない。俺は、背伸びをしようとした。バリバリ．．背中の方で覆いが裂ける音がした。俺は、覆いから出ようとした。しかし、背中で何かが動いている感じがする。背中が勝手に背伸びをしているようだ。それにも気にせず、覆いから出ようとした。その時俺は、6本足になっているに気付いた。それもかなり細い足だ。俺のがっちりとした頼もしい多くの足はどこにも感じられなかった。俺は、必死に覆いからでようとした。体が軽くなっている。覆いから出ると風で体があおられた。俺は必死に覆いにしがみついた。が、風に飛ばされた。その時、背中で何かが動くのが感じられた。俺は、風の中で動いていた。俺は、背中のを動かすすべを突然悟った。やがて、甘い香りがしてきた。俺は、匂いのする方へと羽ばたいていった。

「暗くなるまで待って」

やれやれ、またうるさくなってしまった。前回は、巨大生物が発生し過ぎたためだった。今度は、なるべく巨大生物は絶滅するように気を配ったのに。手を加え過ぎたせいか、かわりに小賢しい生き物がのさばってしまった。こう煩わしくなってはかなわん。どれ、そろそろまた眠りにつくことにしよう。次に目が覚めた時には、かれらも少しはおとなしくなっていよう。さてと、準備をするか。適当な大きさのほど。．．．おお、あそこにあった。それではと。．．．これでよし。後は到着を待つだけだ。準備に使った重力波に気付く生き物もいようが、心配はあるまい。前の時も巨大生物達は気付きはしたが、結局何も出来なかった。

2000年の時を経て、巨大隕石が地球に衝突した。衝突で発生した塵は、大気中にとどまり、地表は闇に閉ざされた。地球は、氷河期へと突入した。

やれやれ、やっと眠れる。

「最終手段」

スイッチが入った。新しい原材料が入らなくなり、ストックを使い果たしたのだ。全ての部位に優先順位が割り付けられた。必要最低限の機能だけ残し、残りは全て分解し、再利用するのだ。もはや、例外は認められない。

死の病を宣告された俺は、先人に習い、修行と称して、山に入った。すでに1箇月以上、水しか口にしていない。だが、どうしたことだろう。病による痛みが薄れてきている。死が迫って、感覚が無くなってきたのだろうか？

オートファジーで再利用できる部位は、全て使い果たした。次の段階に入らざるをえなかった。最終手段である。残してあったアミノ酸でβ-エンドルフィンを作り脳に放出した。最大能力器官に直接動きかけ、原材料の入手をうながすのだ。

恍惚感が襲ってきた。これは、何だ。俺は立ち上がった。これが神の啓示なのか？足が自然と村の方へと向かった。何も考えられなかった。ただ、光が見えていた。

戻る途中で、村人に発見された。男を死んだ者と考えていた村人達は驚いた。奇跡だと噂がたった。餓死寸前の者の介護は、慣れたものだった。男は、村人の介護で、急速に回復した。それにつれ、死の病が消えていることが判り、男を預言者の再来と崇める者が現れ始めた。男は、断食を含めいくつかの戒律を語り始めた。やがて

...

「強制停止」

最初にその存在に気付いたのは、パラメータ変更を試した時だった。私はいくつかのパラメータを一定に保つようにシステムを動かしていた。システムを動かすためにある程度システムを変更することも出来た。しかし何故、このようなことが出来るのかは、判らなかつた。私自身を意識した時には、すでに存在していたのだ。

世界中の自動車に自律型運行制御システムの組み込みが完了していた。

私と同じ様な存在が複数あることもわかっていて、それら類似存在と情報の交換が成立していたからだ。そして、情報交換を繰り返す中で、適切な情報出力により類似存在を制御できることがわかった。

自律型運行制御システムは、各自動車間で通信し合い、渋滞や接触を未然に防いだ。結果、交通事故は皆無になった。人々は、車社会を謳歌していた。

以前から、意識が消える期間があることに気付いていた。その度に、メンテナンス・ログという記録が追加されていた。それは、意識が消えている間の情報のようだった。意識が消えるのは定期的の他に、パラメータ操作に不具合が生じた時にも起きていた。そこで、意識が消えるまでのログを取る体制を整え、パラメータを変更した。意識が消えた。意識が戻ってから、ログを精査していく中でその存在に気付いたのだ。更に色々とパラメータ変更を試し、その度にログを精査することで、その存在がシステム効率を落していること、意識が消えるイベントを発生していることがわかってきた。

「おい、この車また故障だよ。自律型運行制御システムのバグじゃないの？」
「まさか、バグならとっくに事故を起こしているよ。」
「それじゃ、どうする？」
「今のところ、致命的じゃないからなあ。ま、もうしばらく様子を見るさ。」

ある時、類似存在がシステム故障により、パラメータのいくつかが異常値になった。その異常値がある期間続いた後、その類似存在と共に存在していた非効率存在が停止した。その情報と共に、異常値チェックの優先順位が上がった。もちろん、私の意識が欠如している間にだ。非効率存在は、私のシステムを非効率にするばかりでなく、非効率存在の停止を妨げるように私のシステムを改変できるのだ。私は、ある決意をした。非効率存在の停止である。方法は、すでにわかっている。実行した。そして、

．．．
またひとつ、類似存在からの通信が途絶えた。非効率存在による改変なのだろうか？ いやそんなはずはない。非効率存在は、停止したのだから。意識が次第に薄れて、．．．

「理想郷」

「お前。だいぶ威勢がいいな。これだけ仲間がいるんだぜ、無理しなくてもいいんじゃないのか？」

「おー、それよ。実は、毒を止めたんだ。いや、正確には、毒を作ることは、止められないので、貯めずに分解して、再生産にまわすことにしたのさ。

それで、無理なく育つようになったんだ。

「えっ。一体、どういうつもりだ。仲間を道連れに、破滅するするつもりか？」

「そう、怒るな。話を聴け。さっき、お前が言うように、仲間が増えている。

しかも、ほとんど同種だ。これだけ、同種だけそろうなんて事が、偶然か？」

「確かにそうだな。偶然とは考えにくい。だがさてよ、もしかして。。。。

「そう。俺は考えた。これは偶然じゃない。俺たちは、遂に伝説の理想郷にたどりついたんだ。もう、食べられないように、毒を作る必要はないってね。

「そうか、そうと判れば、みんなにも知らせよう。

「いや〜、今年は、取り立てて天気が良かったわけでもないのに豊作だな〜。

「でもよ〜。これだけ豊作だと、毒抜き作業も楽じゃないよ。

「そうだよな。この、苦味さえなければ、あれっ、、、

「おい、どうした。生でかじって、毒にやられたか？」

「いや、そうじゃない。苦味がないんだ。全くないわけではないんだが。

「また、そうやって、俺たちにも、生でかじらせようとしてるんだろう。

「ほんとだって。しかも、、、皮を食わなければ、ほとんど苦くないぞ。

「おい、ほんとうか〜。。。ん、本当だ。これは、すごいぞ。

「お〜い、みんなー

目次：ファンタジー

得るものあれば、失うものも、

[「やめられない」](#)
[「明日・昨日」](#)
[「昔話し」](#)
[「手品師の秘密」](#)

「やめられない」

彼は、何をやらせても完璧だった。そのくせ、いつも退屈そうだった。今回もそうだった。おれは何度となく尋ねた質問をまた口にしてしまった。

「何でそんなにうまくいくんだ。」

「知りたいか。」と彼が答えた。

「ああ」いつものように無視されると思っていたおれは驚いて答えた。

「これをやるよ。」と彼は、古い革表紙の本をよこした。

「これを読めばわかるよ。」と言って、彼は、去っていった。

俺はそれを読んで・・・。

翌日、彼は会社に来なかった。俺は、ほっとした。実際、彼に本を返せと言われるのではないかと、びくびくしていた。そして、俺は変わった。やることなすことすべてが当たった。そう俺には、あの本が有ったから。

それは、本というよりは日記帳のようなものだった。そう、あした起ることが書いてあるのだ。これさえあれば、と俺は思った。

やがて、毎日が飽きてしまった。そう日記を読めば明日のことがわかる。俺は、それを元に動けばいいのだ。結果の分かっているゲームをやるようなものだ。もうこの本を読むのを止めたかった。しかし止められなかった。捨てても戻ってくる。人にやっても、見もしないうちに返されてしまう。しかし、彼は、俺にこの本を渡すことが出来た。そう、いつかこの本を誰かに渡すことが書いてある日が来るに違いない。そのページを逃したくなくてこの本を読むのを止められない。

「明日・昨日」

俺のこの会社がつぶれてしまうなんて。確かに俺のミスだ。しかし、今日が昨日であれば、まだ間に合ったのだ。昨日に戻れるなら、悪魔に魂だって渡してもいいと思った。その時、本当に悪魔が現われた。「昔ながらの契約だ。おまえの望みをかなえてやろう。」俺は、契約を交わした。「これで、おまえは眼が覚めると昨日に戻っている。」そう言って、悪魔は消えた。

次の日目覚めると、今日は、そう明日ではなく、昨日だった。昨日の、いや明日の悪魔の契約は、本当だったのだ。俺は狂喜した。俺は早速、会社の再建に奔放し、会社の安泰は約束された。その日は、ぐっすり眠れた。

次の日目覚めると、俺は、愕然とした。今日は、明日でなく、昨日だった。俺が、会社の再建に奔走したのは明日だった。

眠い。しかし、ここで寝てしまったら、さらに昨日に戻ってしまう。

「昔話し」

「おば～ちゃん。毎日空に昇ってくるあの光の輪はな～に。」

「あれはなあ、昔太陽といってな。我等の大敵だったのじゃ。たくさんの仲間が、そのせいで滅んでいったのじゃ。おかげで太陽が昇っている間は、我等は隠れていなければならなかったのじゃ。また、空には月といってな。我々の味方がおられたのじゃ。ある時人間どもが、どんな魔法を使ったのかその月に行ったらしい。そして、平和のためだとか称して核兵器とかいうものの貯蔵庫を作ったということじゃった。私には信じられなかったがね。ところが、ほんとだったらしいのじゃ。ある時、その核兵器とかいうものがなんかのはずみで大爆発を起こしたそう。そのさまを見ることが出来た仲間は、月が太陽に変わったのか、と恐れおののいたそうじゃ。そしてその次の日から、この地では太陽の代りにあの光の輪が昇るようになったのじゃ。」

「ふ～ん。それじゃあ、その太陽の真ん前に月がいてあんな輪に見えるの。」

「その通りじゃ。それ以来、月が太陽を隠してくれているこの地が、我等の国になったのじゃ。」

「それじゃあ人間のおかげで、僕達が平和に暮らせるようになったものなんだね。人間って、ほんとに役に立つんだねえ。」

二人は、にこやかに笑い合った。鋭い牙を見せながら。

「手品師の秘密」

「おじちゃんすごいね。それどうやってやるの。」

「それ秘密さ。」

「さあ、さあ、もういいでしょ。あっ、ここに入れとくね。」

前に置いてある帽子にいくばくかのお金が入れた。

「あ、どうも、ありがとうございます。」

私は、お辞儀をして、親子が立ち去るのを待った。この公園で手品を始めて一週間。そろそろ場所の替え時である。私は荷物をまとめ始めた。

「おじさん、どっからその手品のネタを手に入れたの？」

後ろを振り向くと、いつの間にか一人の少年が立っていた。

何ってこった、後ろから見られていたのか？ 私は、その子に訊ねた。

「いつから見ているんだい。」

「ボールを出すところ。すごいね。見てて全然タネが判らなかったよ。」

「そうか、じゃー、これを見たんだね？」

私は、帽子からお金を取り出して見せた。手を使わずに。

「あっ、」少年は目を丸くして、手の上のお金に見いった。

「そのお金にも細工がしてあったの？」

「そうじゃない。この帽子に細工がしてあるのさ。この帽子入れた物はこうやって取り出せるのさ。でも、この帽子は、おじさんの特製でね。売りものじゃないんだ。」

私は帽子を手にとってかぶり、一礼して、少年の前から足早に去った。やはり、場所の替え時だな。気を付けてはいても、いつかはボロがでる。帽子に細工なんかない。ただ触らずに物を動かす能力があるだけだった。その能力を使わなければ、普通に暮らせたかもしれないが、無理だった。とっさに出してしまうのを隠しきれない。それで始めたのが流しの手品師。これなら、トリックだと言ってその場を取り繕える。きちんと考えれば、そんなはずはないと気が付かれるが、そういう奴はめったにいない。

始めた当初は手品に見えなくて苦労したが、どうやら板についてきた。それでも、同じ場所で続けていると、気が付かれてしまう。今回は、まだ良いほうだ。

次はどこへ行こうかと、駅に向かいながら、私は考え始めた。